

長期の不登校中学生を再登校へ導いた実践的研究

田中 和代

1、はじめに

この研究の目的は、長期の不登校生徒^(注1)を再登校に導くことである。

文部科学省が発表^(注2)した平成21年度の小中学生の不登校生徒の数は、減少したとはいえ、全国で122,000人と少なくない。「全国引きこもりKHJ親の会」等の調査^(注3)によると、引きこもり推計160万人のうち、中学高校時代からの引きこもりがおよそ34万人とされている。「不登校児童生徒数」と「引きこもり者数」の相関は明らかにはなっておらず、引きこもりの数の真偽はともかくとして、中学高校までの不登校と引きこもりが密接な関係にあることは否定できないであろう。

この実践では、長期の不登校生徒の7人が相談室登校に至っている。しかし相談室登校ができたからといって、社会に適応できる状態になったということではない。旭川市の例^(注4)では15年間に「登校拒否学級」を卒業した中学生179名がおり、その後の適応状態を調べている。把握できた者のうち、社会的適応が良好な者は70名で、不安定な状態の者は38名、停滞している者は29名となっている。このように「相談室登校＝ハッピーエンド」というわけではない。が、再登校への取り組みは、将来の引きこもり者の数を減少させるためにも、またその生徒の人生の可能性を広げるためにも必要なことと考えている。

登場人物は、プライバシー配慮の点から仮名にするなど本質を損なわない程度に粉飾していることをお断りしておく。

2、対象と方法

今回の実践は平成20年度の4月から翌年3月までの1年間、筆者がスクールカウンセラー（以下SC）として、取り組んだ報告である。実際には、相談室

担当教員^(注5)(以下担当教員)や相談室担当職員^(注6)(以下担当職員)らと連携して行った。

対象はある地方都市のA中学校である。周辺地域は低所得者が住む公営住宅があり、そこに外国人労働者、片親家庭、暴力団関係者などが多く住んでおり、「荒れた地区」と言われていた。生徒数は全校でおよそ800人。毎日の欠席者数は50人前後と多い。長期の欠席者(年間30日以上)も多く、本論ではその長期欠席者の中でも1年以上欠席を続けている長期の不登校の生徒3人についての実践の経過や相談室環境について報告する。

3、結果

従来からA中学校の相談室には再登校した生徒が通ってきていた。筆者が長期の不登校生徒の再登校に取り組み始めたのは4月、相談室登校していた生徒は1日3人から5人であった。それが、11月には毎日10人以上の生徒が相談室登校するようになった。多い時は18人もの生徒が登校した。それにつれて、毎日の欠席者の数がそれまでの約50人から30人へと減少した。そしてこの1年間で7人の長期の不登校生徒が再登校を果たした。それらの生徒は、21年度中安定した相談室登校を続けることができ、一部の生徒は教室の授業にも参加していき、それぞれ高校進学や就職をしていった。

(1) 事例

事例1、(中学3年男子 卓巳)：手紙でメッセージを伝えたことで再登校に

卓巳は2年生の11月に、骨折したことをきっかけに欠席しはじめた。その後1年半休み続けている。自宅や親の携帯に電話をしても繋がらず、メッセージを残しても返事がないので連絡が取れなかった。担任が2週間に1回家庭訪問してもマンションの扉は開いたことがない。表札もなく、本当に卓巳が住んでいるのか、生きているのかなど安否の確認もできない。ただ、テレビの音が聞こえ電気のメーターが回っており、誰かが中にいることが推測された。こんな

事情で2年生のクラス替えで担任になった教員は、卓巳の顔を見たことがない。

7月：SCと担当教員は、取り付く島がない状態の卓巳の保護者と連絡を取るためにどうしたらよいかを話し合った。その結果が次である。

①毎週SCと担当教員で決まった時間に家庭訪問をすること。

②誰も出てこない時は、必ず簡単な手紙を置いてくる。

手紙の例

卓巳君

元気になっていますか。

私はカウンセラーの田中です。もう一人はA中学の〇〇先生です。卓巳君に学校に来てほしいと思います、お宅を訪問しました。中学校には相談室があつて、みんなで遊んだり勉強したり楽しく過ごしています。是非、卓巳君も来て下さい。次は来週の金曜日の二時頃来ますね。

田中カウンセラー

九月三日 〇〇先生

9月：2回手紙を置いてきたが何の連絡もないので、次の作戦を立てた。

手紙の内容を、保護者宛にし、保護者が「こちらから学校に連絡をしよう」と感じるようなものに変えた。

新しい手紙の内容。

- ・一年以上連絡が取れず、卓巳の安否が確認できず、学校は心配している
- ・保護者には子どもを登校させる義務が法律で決まっている。
- ・このまま確認がとれなかったら、児童相談所や公的機関に連絡をして、安否確認をすることになるので、その前に保護者から連絡をほしい。

9月中旬：手紙の内容を保護者に訴える内容に変えたが、それでも連絡が取れないので、再度手紙の内容を次のように変えた。

- ・〇月〇日の〇時に、学校から電話をするので、ぜひ出ていただきたい。
- ・学校からの電話は次の順番でします。[自宅電話→父の携帯電話→母の携帯電話→父の勤務先→母の勤務先]。
- ・もし連絡が取れなければ、児童相談所等に通報することになるでしょう。

あらかじめ手紙で予告した日時にこの順番で電話をしたところ、母の携帯電話の段階で連絡が取れた。その結果、卓巳が元気で家にいると話してくれた。「一度、卓巳君を登校させて元気な顔を見せてほしい」と伝えて、やっと登校が実現した。その後登校した卓巳は、主に相談室にいて学習に取り組んだ。

11月：10月は相談室登校が順調に続いたが、11月に一時登校が途切れた。その時もSCと担当教員とで家庭訪問をしたり、電話したりして再々登校し、その後は卒業まで登校が続いた。

(卓巳が登校後に語った、引きこもっていた間のこと)

- ・高校進学したいと考えて家庭で一人で学習をしていたが、理解できないことが多かった。
- ・再登校しなかったが、家族も何も言わないし、長い間登校していなかったの
で、再登校のきっかけがつかめなかった。
- ・先生たちからの手紙も見つけたが、親が何も言わないのでどうしてもできなかった。

その後も相談室登校を続け、一部教室復帰をし、3月に高校進学が決まり、無事卒業していった。

事例2、(中学3年女子 綾香) 2年以上の不登校から時々の再登校を実現

綾香は1年生の5月から2年以上学校に来ていない。家には2年前に不登校で卒業した引きこもりの兄がいる。綾香と1年生の担任とのメールは細々と続いていた。綾香の住居が「危険だから近づかないように」と言われていた公営住宅で、2年3年の担任は綾香と顔を合わせたことがなかった。そこで、SCと担当教員とが対応を話し合い、1年生の担任からメールアドレスを聞き、メー

ルでコンタクトすることに決めた。

綾香にメールで訪問を申し込むと、快く承知してくれた。行ってみたところ綾香の住まいは言われているほど危険な場所ではなかった。綾香の部屋は布団が敷いてあり、半病人のような生活をしていて、枕元には灰皿が置いてあり、喫煙していると思われた。綾香本人は会ったばかりでも臆することなくパジャマ姿で話をしてくれた。筆者たちの「一度学校に行こう」という誘いには「学校なんて興味ないから行かん」と拒否した。

拒否はしたが綾香の拒否感強いものとは思えず、単純に興味がないので学校に行きたくないと言っているように思えた。綾香が興味を持っていることは2つある。ロックグループの大ファンで、自宅でそのDVDを見たり、CDを聴いたりして過ごすこと。2つ目は、オシャレである。髪の毛は金髪に染めて、化粧をしていた。そこで、「一度くらい学校に行こうよ」「学校に行ってもすることない」「じゃあ好きなタレントのDVDを学校で一緒に見よう」「じゃあ、一回だけ行く」ということで、初めての登校が実現した。

綾香の登校を管理職に報告すると、「金髪で化粧をしているとなると、生徒のいる時間には登校させられない」ということで、夜の登校となった。初めての登校の日、綾香は完璧なメイクをしてきた。校長、教頭に挨拶をして記念撮影。担任と誰もいないクラスに行き、記念撮影をした。そして、相談室でDVDを見て、SCや担当教員とタレントのことや、家族のことなどおしゃべりして帰った。

このことをきっかけに綾香はSCや担当教員とメール交換するようになった。メール交換の中で、2週間に1回の登校をすることになり、定期的な登校が始まった。2週間に1回の登校になったのは、SCが送迎できる日がそれだけしかないという理由からである。そして管理職からは、化粧で金髪の姿なので、他の生徒の目につかないように裏口から入り相談室からは出ないという条件がついた。

綾香は登校を経験するようになり、次第に家にいることが退屈に思えるようになったようだ。「もっと頻繁に登校したい」と希望してきたが、ほとんど外出したことがないせいか自分で歩いての登校はしようとしなかった。他に送迎の都合などがつかず、およそ2週間に1回の登校が3年生の10月から卒業まで

続いた。相談室では学習は一切せず、教員とのおしゃべりを楽しみに来ているように見えた。次第に慣れていき、次第に同年代の生徒と遊ぶようになっていった。

担当教員と話をする中で、綾香の家が経済的に楽でないこと、中学を卒業したら働きたいことが語られた。担当教員は、働き口を見つけるには、フリーペーパーで会社や店を見つけ、そこに電話して面接を申し込む方法があること、金髪では面接で通らないだろうことなどを伝えた。その後、学校でハローワークの職員と面接などを繰り返したが、就職先は見つからなかった。2月になり、綾香が自分で家の近所の飲食店に電話で面接を申し込み、自ら金髪を栗色の髪に染め直し、パートの職を見つけた。世間知らずで、不器用な綾香なので、勤務が続くか危ぶまれた。しかし真面目な働き方が認められたのか、その後パートの時間も延び、一年を経過した今も安定した働き方ができている。

事例3、(中学2年女子 菜月) 相談室で学習が進み、登校が定着した

菜月は1年生の6月から1年以上登校していない。理由は無気力からの怠学ではないかと推測された。3人兄弟の末っ子で、上の2人はニート状態で家におり、菜月も小学校の時から休みがちだった。菜月の親は子どもの意に沿わないことはせず、登校刺激はしていない。迎えに来た担任に「熱があるので行かせられない」などと嘘を言ってまで子どもを守る(?)タイプの親だった。菜月は登校はしてないが、帰宅した近所の子どもたちと公園などで活発に遊んでいた。

担任とSCは菜月の家を何回も訪ねるが、親が会わせてくれない。それで近所で一緒に遊んでいる友達に話を聞いて情報を得ていた。ある時、その友達が「先生、こんど菜月を学校に連れてこようか」と言ってくれた。それで菜月の相談室登校が始まった。

5月：親や本人との打ち合わせで最初は週2日から始めた。菜月は学校に来ることに大きな抵抗はないようだった。最初は1人ぼっちでいることが多かったが、相談室に同学年の女子生徒がいることから次第に話をするようになり、登校する日数が増えていった。

7月：ほぼ毎日登校できるようになった。学習は主に漢字の練習を行った。放課後は相談室登校をする数人の生徒と遊ぶなど仲良くなっていった。教室の授業には時々参加したが、授業内容がわからないので、音楽、体育、家庭科、美術などに出ていた。

9月：毎日の登校が続いていた。菜月の保護者は、再登校を始めた頃は「今日は熱があるから学校に行ってはいけない」などと登校をとめていたこともあるが、次第に登校することを応援し、学校に感謝をするようになった。そして菜月自身も「早く勉強をみんなと同じに追いついて、教室に戻りたい」と言って、学習に励んだ。

2月：学習に熱心に取り組み、2年生の終わりには、中1の数学まで理解できるようになっていったが、数学と英語の授業に出てみてみんなとの学力差が大きいことを悟り、結局学級に完全に返ることができなかった。3年生でも同様に相談室登校して卒業していった。そして定時性高校に合格し、菜月の家では初めての高校生となった。

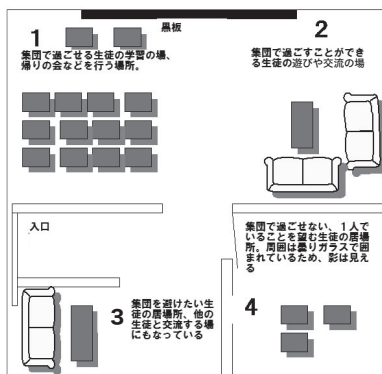
（2）相談室の環境整備

A中学校の相談室は、職員室や保健室のすぐそばにある通常の教室だった部屋を使っている。その運営は、基本的にSCと担当教員とが決める。その方針に沿って実行に移してくれるのが、担当職員である。

①生活面の支援

担当職員が相談室登校してくる生徒と話し合って、出席や学習の目標を決める。そして決めた目標などを生徒が表などに作成し壁に貼る。出席した時はシールを貼り、達成の様子が一目で見られるようになっていく。また担当職員は生徒全員の正確な登校と下校時間や、その日の様子を記録している。

図1



②学習面の支援

- ・学校長のはからいで、1日2、3時間、あいている教員を相談室に派遣して、授業をしてくれることになった。1時間目は来ている生徒の数が少ないので、2時間目から授業が組まれていた。実際の授業は、英語や数学などはレベル差があるので一斉授業ではなく、個別に指導することが多かった。
- ・相談室ではもともと、生徒のやりたい学習をさせていた。だから漢字書き取りが好きな生徒は書き取りばかりをしていた。しかしこれだとなかなか学力アップにつながらない。そこで「早く学力を上げたい」という生徒の声から、担当職員が数学や英語のテキストを用意した。数学では小学校の「分数の掛け算」から始まるスモールステップの教材を用意した。これで、何人かの生徒が中1の計算問題程度まで到達するようになった。

③相談室の機能

図1. では左側が廊下側で、右側が窓側となっている。廊下側の黒板に近い入口を施錠してあるので廊下から相談室内部は見られないようになっている。

4つのスペース

1のスペース：集団で過ごすことができる生徒が、授業を受けたり、帰りの会などを行う場所。机とイスが置いてあり、相談室登校をする生徒各自の席が決まっている。

2のスペース：集団で過ごすことができる子どもたちの休み時間に過ごす場所。相談室外から会いに来る生徒もここにきて、一緒に過ごす。

3のスペース：入口を入ると、衝立に囲まれていて戸が開いてもすぐには見えない。右の衝立の奥にソファがあり、集団に入りたくない生徒たちの居場所となっている。集団に入っている生徒もここにきて、トランプなどを楽しんでいる。

4のスペース：天井までのパーテーションで区切られた個室となっている。壁は曇りガラスなので、ガラスを通して大まかな外の動きがわかる。人と会うのが嫌な段階の生徒がいる場所となったり、カウンセリングのスペースとして使っている。

4、考察

今回の長期不登校生徒の中で再登校を果たした3人を含む7人の生徒が、再登校と安定的な登校に結びついたのは、大きく2つ要因が考えられる。一つ目は「家庭訪問」であり、二つ目は「相談室の充実」である。その2つを中心になぜ再登校に結びついていったのか、生徒の心理状態も含めて考察していく。

(1) 家庭訪問

家庭訪問は長期不登校の生徒の再登校には不可欠である。田薦^(注7)も、不登校・引きこもりの生徒への支援は教員やSCの家庭訪問や訪問面接が「やり方次第では不登校・引きこもりの心理的援助には大変有効であり、個人カウンセリングではなかなか達成困難な効果をあげうると考えている」と述べているが、筆者も同様に考えている。

このような家庭訪問のメリットを他のSCに話すと「時間的余裕がない」などと言われることがある。しかしそれほど時間はかからない。訪問時間は、生徒に会えず手紙を書く時間だと3分もかからないので、週に1～2時間もあれば、少々話をしても5、6軒の訪問が可能となる。

①教員とSCとで家庭訪問することのメリット

今回担当教員とSCとが組んで家庭訪問し再登校へつながった。組んで訪問することのメリットは何だろう。

SCは生徒への関わりかたについて専門的な観点に立ったアドバイスができる。例えば、「ここでは無理しないで」など生徒への関わり方や、次のステップなどの見通しなどについても効果的なアドバイスができる。

一方担当教員は、訪問先の生徒の家庭環境や学校での情報を提供することができる。例えば「次の家は継母が育てているが、継母も生徒を可愛がっている」だったり、生徒に「仲良しだった〇〇ちゃんも会いたいと言っている」「先生はあなたのお姉ちゃんと仲良しだったよ」など、教員は子どもの心に届く具体的な内容を知っているのである。

SCと教員とで行くことの良さは、専門的で有益な情報を提供しあうことで、

安心して行動できるということであろう。

②手紙は有効な伝達手段

家庭訪問は有効であるが事例にあるように、訪問しても会えない場合も少なくない。せっかく訪問しても、これでは出かけてきた甲斐がない。そういう場合は手紙を置いてくる。手紙はすぐに反応がなくても、後で生徒に聞くと、何回も繰り返し読み「待っていてくれてるんだとうれしく思った」と再登校に影響力があることがわかった。

事例では手紙は一通だけの紹介だが、実際には一回の訪問で5、6通の手紙を置いてきた。長期の不登校生徒だけでなく、2、3日欠席が続いた生徒の家に訪問して置いてきても効果がある。生徒に「ああ！休むと気にしてくれる先生がいるな」というメッセージも伝わるからである。

また広汎性発達障害でつらくなり時々休む生徒がいた。欠席が続く時は手紙を置きにいく。親が働きに出ており玄関は開けてくれないが、手紙は発達障害児者の多くが得意な視覚情報だし、繰り返してゆっくりと見れるのでメッセージが伝わりやすい。その生徒は置き手紙した翌日は必ず登校してくれており、効果的だったといえる。

手紙はB5とかA4の紙に太字で、短くてわかりやすく書く。最初から会えないとわかっている場合は学校で書いていくが、いつでも玄関の前で書けるように、紙とペンを用意していくことは大切なことである。

内容については、特別にメッセージがない時は次のような内容を書くといよい。

- ・あなたに会いたい。
- ・相談室ではみんなが楽しく勉強したり遊んだりしているよ。
- ・嫌なことは無理にさせないよ。
- ・先生たちみんなが待っているよ。
- ・次に家庭訪問する日時。

③家庭訪問は無理しない頻度で長く続けると効果的

小野口^(注8)は、教員は「最初は足繁く家庭訪問をしますが、変化が見られないことから、次第に足が遠く……最初から飛ばさずに、自分にとって無理の

ない程度に、しかし継続して」と述べている。この通り、教員が訪問しても変化が見られないことから、次第に徒労感を覚えて足が遠のいていく現実をよく見かける。これだと生徒が「前はよく来てくれたが、最近は来てくれない」と見捨てられ感を持ってしまいがちである。生徒は教員と会わなくても、教員が来たことはわかっている。だから無理しないで、しかし同じペースで続けることが一番大切なこととなる。手紙などで教員の気持ちを伝えていれば、忘れた頃に会えることも少なくないのである。

④登校させようとししない親への対応

菜月の親に置いてきた手紙は、それまで家庭訪問しても何の音沙汰もなかった親を慌てさせた。親は、今まで玄関のチャイムを無視しても、電話に反応をせずとも困った事態にはならなかったのに、それが通用しなくなったのである。つまり、学校から親の職場に電話されると、「困る」ということになる。それで親は1年ぶりに慌てて電話に出てくれた。しかしそれはいつでも電話をかけてよいということではない。「何月何日の何時頃にこんな順番で電話をする」などと細かく予告しておき、その通りにする。菜月のケースでは「まず自宅に電話して繋がらないので父の携帯に、それも繋がらないので母の携帯にかける。それでも繋がらなければ父の職場へ、その後母の職場と順番」と予告通りにする。これは悪く言うと「電話に出てくれなければ職場にばらしますよ」と一種の“おどし”ととられるかもしれない。したがって、これは最後の手段であり、その前に様々な手段を用いて連絡を取ることをすることが必要である。

(2) 相談室の運営

中村、田上^(注9)によれば、相談室の充実が安定的な登校や教室復帰に繋がっているという。筆者も、今までせっかく再登校しても再び不登校に戻る例を知っているので、安定的な登校を支えるために相談室環境の充実は不可欠と考えている。

その相談室環境の充実を担当教員が主になって活動する段階である。小林^(注10)が言うように、再登校した生徒を迎えるために相談室を整えるなど「受け入れ側の場を整えることは教師だけがなしえる仕事」であるからだ。しか

し、どのように整えるかは、やはりSCの専門的なアドバイスが有効となるので、ここでも連携は必要なことと考える。

①相談室を生徒の居場所にするには、担任的な存在が必要

再登校しても、学校側の態勢が整っていないと登校は続かない。相談室に常駐する教員等がない学校もあるが、常駐できる担任のような存在（本論では担当職員）は不可欠である。常駐できる存在がないと、せっかく登校しても、孤独だったり、まとまりがなかったりする。担任的な存在が相談室を「居場所」と認識させるのである。

担当職員の仕事は、出席簿をつける、学習内容を揃える（小学校中学年の算数教材を選び揃える）、担当教員等と相談して、生徒たちに登校計画や学習計画などを立てさせる。目標をクリアした時は誉めてシールを貼らせるなど、生徒たちが張り合いを持てるような工夫をしてもらう。もちろん毎日欠かさず「朝の会」や「帰りの会」も実施してもらうことになる。しかし何といっても大切なことは悩みを聞いたり、ケンカの仲裁をしたり、一緒に喜びあったりすることだ。そんな時間を共に過ごすことにより次第に、相談室は「生徒たちの居場所」であり、担当職員は「担任の先生」という存在となっていく。

担当職員の人選にはこんな行き届いた配慮ができる人かどうかを見極めることが大切になる。

②学力を保障する必要性

最初は相談室登校してくれるだけで教員も生徒も満足感を持てていても、相談室登校が安定してくると、教室復帰や高校進学という目標も視野に入り、学力向上の必要性が高まってくる。また学習する権利の保障という点でも学習の必要がある。長期の不登校生徒となると、小学校時代からも学習がおろそかになっていることが多い。相談室登校の生徒の多くは、過去に「学習内容を理解できない」という失敗経験がある。基礎学力がないのに、一律に中学校の課題を与えることは「分かる喜び」も得られにくく、学力向上に結びつきにくい。担当教員や担当職員は、ひとりひとりの生徒の学習理解がどこで停滞しているか、どこまで理解できているかを見極めることが必要となる。これがわかれば、

そこからやり直せば、前に進むことができる。

③相談室で成長できる人間関係スキル

相談室の生徒数が5人以上になると、相談室そのものが小集団としての機能を持つようになり、グループの成員間の相互作用と個人の成長が望めるようになる。再登校しはじめは、生徒は緊張しているので問題発生は少ない。しかし時間経過とともにリラックスし遠慮していた我が出てくる。リーダー的な存在、雰囲気明るくする存在が出てくると同時に、自己主張できない生徒、自分の思うようにいかないと攻撃的になる生徒などが出てきてトラブルもたびたび発生してくる。もともと、不登校の生徒は教室集団で上手にコミュニケーションが取れないで学校に來れなくなった生徒も多いのでめごととは当然といえる。しかしこのようなトラブルこそ、人間関係のスキルを学ぶ機会ととらえて支援をすることが大切なことである。

自分が中心でないと怒ったり帰宅してしまう女生徒美香がいた。周囲をかき回すので、相談室の悩みの種であった。しかし相談室にいる半年間に、徐々に適切な行動の仕方を身につけていった。今までの学級での美香は、問題行動を起こし担任から怒られ、級友から無視され、キレて帰宅していた。しかしスタッフの手厚い支援が可能な相談室の小集団の中では無視されることなく、何回も話し合いができ、我慢や妥協することを経験し、人間関係の作り方を学んでいくことができた。

私の強い生徒だけでなく、自己主張できず苦しくなる生徒にも丁寧に話を聴く、アサーショントレーニングなどを実施することでやはり人間関係スキルを学んでいくことができる。

④教室のレイアウト

今回紹介した相談室のレイアウトは、空き教室を使用したものなので、どの学校でも実施可能であるが、基本はそれぞれの学校の事情にあったレイアウトが必要である。

相談室登校をする生徒は様々なタイプがおり、ひとくくりにはできず同時に、同じ場所に入れられないことがある。相談室登校をする生徒の中には「友

達に会いに来る子」もいるが、「会えない生徒」もいるし「発達障害で会えない生徒」もいるし、いじめや非行などで「いじめる生徒」「いじめられる生徒」がおり、一緒にの部屋に居させられない場合もある。そんな生徒にそれぞれのスペースを用意する訳にはいかない。1つの空き教室を4つのスペースに区切ることは便利である。また隔離されたスペースからは、ガラス越しに外の動きが少しわかるので、不安を感じず、外の声に惹かれてみんなのスペースに出てくるという効果もある。

⑤相談室登校から教室復帰は慎重に

不登校の生徒たちを通常のクラスに戻すことは慎重さが必要である。相談室の生徒は、人間関係を作る力が弱く、学力が低いことが多いようだ。何年間も登校してない生徒にとっては、数ヶ月の教室復帰は負担が大きい。だからといって、教室に戻すなということではもちろんない。生徒は、教室で苦しい思いをしながら授業を受けることに不安を感じている。生徒と相談して「がんばって教室に戻って、しかし無理なら相談室に居てもいいよ」と教室にいつでも戻ってよいということを保証すると安心して挑戦できる。

今まで述べてきたように、相談室といえども、それなりに、学習や社会性を学ぶことができる。ずっと相談室にいることになっても、「それはそれでよい」と考えると、相談室運営が楽になる。

⑥一般の教員の理解を深めるために

今回の事例では、学校全体で「不登校生徒をなくす」に取り組んでくれたことが、一般の教員の不登校生徒の理解に結びついた。

校長は相談室の学習の時間割に、一般の教員の派遣を決めてくれた。結果、1日に2、3人の教員が授業を担当してくれることになった。授業内容は当然通常のクラスと同じにはできないが、相談室の生徒たちにとってみると「ちゃんとした教科の先生の授業を受けている」という自信につながっていった。

一方、一般の教員の相談室への理解は低く今まで「相談室は遊んでいるだけ」と捉えていたのが、相談室の授業を担当するようになって相談室への理解が進み、正に一石二鳥の効果があつた。

(3) 家から相談室にどうつながるか

①訪問する側の心理

不登校も長期になると、再登校を促すような働きかけは少なくなる。当初は、家族も「このまま学校に行かなくなると困る」という危機感から、強く登校を促す。しかし本人の学校への拒否感が強く、登校を促すと子どもが緊張して、家での関係がうまくいかず、時間が経過すると家族も「こんなに嫌がっているのに学校に無理やり行かせなくても」と半分あきらめの気持ちで不登校状態を受け入れるようになってくる。

一方、学校側の働きかけも時間とともに変化する。担任は、初めはなんとか生徒に会い説得を試みるが、うまくいかない。「先生なんとかしてください」などと言っていた家族も不登校状態を認めるようになり、家族が先生の登校刺激を断ったりして、次第に子どもには会えなくなる。そして学年が変わると、生徒を知らない担任になる。不登校が起こった時の担任ではないので当事者意識(自分の対応がまずかったから不登校になったのではないかという責任意識)もなくなる。それで、学校のきまりなどで「週一回家庭訪問をする」などはしているものの、学校からの配布物を渡したり親に現状を聞くなどの内容となり、不登校状態が長く続くことになるのである。したがって、長期の不登校だから難易度が高いと敬遠せず取り組むことが重要なことであろう。

②再登校につながった生徒の心理

長期間登校していなかった生徒が再登校することを難しいと考えるのが一般的だが、なぜ再登校が可能になったかを考えてみる。

生徒の精神状態からみると登校を拒否し始めた頃、不登校のきっかけとなった「仲間外れ」「意地悪」などで傷ついたりした傷も、少しずつ癒えてきて拒否感が薄れてくる。その結果、当初のうつ状態や強い不安がなくなり、落ち着いてくる。

つまり、不登校当初の「一時的緊急避難が必要な状態」が、長期間学校に行かないことで気持ちが安定して「健康な精神状態」に戻ってくる。そうすると、健康な精神の時の「友達に会いたい」「勉強したい」「進学したい」などの気持ちが戻ってくると考えられる。

このような精神状態の変化に気づかないで「登校刺激はしないほうがよい」を金科玉条のごとく続けると、不登校は長く続くことになる。

打撲や捻挫を例にとって説明してみる。ケガをした時、関節内部が傷つき出血や炎症を起こすことがある。この時には「冷やす」のが原則で、入浴などで「温める」と、炎症がひどくなり逆効果となる。しかし期間をおき炎症が落ち着いたら、処置の原則は「冷やす」から「温める」にかわる。

不登校もこれと同じで、「登校刺激はダメ」と言われたら、いつまでも同じような対応でよいのではない。子どもの状態により、対応を変えていかなくてはならないのである。まずは生徒と仲良しになり、関係を作っていく中で生徒の心理を見極めることが大切である。

5、最後に

これまでに述べた筆者の経験を多くの方に読んでいただき、長期の不登校生徒を少しでも減らしていただきたいと考えて本論を書いた。ここで述べたように長期の不登校には家庭訪問が有効な手段であると考ええる。SCの中には病院のカウンセラーのように「来る者は拒まず、去る者は追わず」というスタンスで、相談室で待機している人もいる。それだけでは長期の不登校生徒に変化は起こりにくい。まずは、相談を担当している学校の教員とよく話し合い、アウトリーチで生徒に会うことから始める勇気を持っていただきたい。

また、相談室に登校した後は特にクラスの担任の力が必要となってくる。朝晩に相談室に顔を出して、言葉を交わす。これらの毎日の交流で担任との関係ができ、担任を信頼できることで、教室復帰へとつながるからである。

最後にA中学校で一緒に活動した相談室担当教員と相談室担当職員、そして私たちの活動に理解して学校全体で取り組んでくれた校長先生にここで感謝をしたい。

- (注1)「長期の不登校生徒」文部科学省でいう「不登校生徒」とは年間30日以上
の長期欠席者で、病気や経済的理由による者を除く者を言うが、本論では1年
以上欠席を続けている生徒を「長期の不登校生徒」としている。
- (注2) 文部科学省の「平成22年度学校基本調査の速報について」によると、「平成21
年度間の長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、不登校を理由とする児童
生徒数（小学校・中学校・中等教育学校（前期課程））は12万2千人（前年
度より4千人減少）で前年度より3.4%低下しました」と発表している。2010.
8.5
- (注3) インターネット上の「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑦ -NPO法
人全国引きこもりKHJ親の会における実態-2010年3月
- (注4) 「登校拒否（不登校）学級卒業生のその後」 村田昌俊他. 情緒障害級幾研究
紀要 第19号 2000 p.61-68 その後が確認できたのは138名で年齢は16歳
から28歳までである。適応できている者は（学生・正規雇用、自営業・主婦
など）で、不安定な者は（アルバイト、パート、定時性高校生など）で、停
滞している者は（学校にも職場にも所属していない、引きこもりなど）である。
- (注5) 相談室担当教員：教諭の中で、相談室やSC関連の仕事を任されている教員。
この実践のA中学校では授業の持ち時間は通常の教員より少なく配慮されて
いた。主な仕事は、空き時間に相談室で学習指導や生徒指導を行ったり、SC
とのコンサルテーションが主な仕事である。
- (注6) 相談室担当職員（省略して担当職員）：学校の教諭ではないが、教員免許を
所持している臨時職員。毎日9時から16時まで相談室で勤務して、生徒と接
している。
- (注7) 「不登校・引きこもり生徒への家庭訪問の実際と留意点」田蔦誠一. 臨床心
理学. 1（2）（通号2）. 2001.3 p.202-214
- (注8) 「不登校が長期化したときの担任の家庭訪問のあり方」小野口吉政 月刊学
校教育相談、ほんの森出版 2005.8 p.22-25
- (注9) 「相談室登校の中学生の相談室での充実感と教室登校との関係」中村恵子他.
カウンセリング研究、日本カウンセリング学会、41（3）. 2008.10 p.62-73
- (注10) 「再登校・再適応を援助する」小林正幸 月刊学校教育相談 ほんの森出版
2002.3 p.78-83